

※インターネット「はらまち九条の会」で、「九条はらまち」の全号を見ることができます。



九条はらまち

「はらまち九条の会」ニュース No. 77
2008(平成20)年10月2日(木)発行

<1955(昭和30)年10月2日、千羽鶴の少女・佐々木禎子さんの命日です>



佐々木禎子(12歳)は広島で被爆したが、無傷で元気に育っていた。しかし、1年前から身体の変調を訴え始めた。ABCC(米軍の原爆傷害調査委員会)で検診すると、原爆症による白血病と診断され、日赤広島病院に入院した。しかし病状は日増しに悪化していった。その時“千羽鶴を折ったら病気はなおる”と友達が言ったのを心にとめ、病床で病気回復の願いを込めながら、薬の包装紙で鶴を折り続けた。しかし「死にたくない」と言いつつ、960羽目の鶴を折ったままで息をひきとった。

○今年11月3日(日)のあきいちではこの禎子さんの「サダコと折り鶴」展を開催します。

『世界は憲法9条をえらび始めた』が陶板に



陶板は美しい色
合いで焼かれてい
ます。カラー印刷
でなく残念です。

○群馬県前橋市にお住まいの本会会員土屋千恵子さんから、以前にも「本会シールの陶皿」を送っていただきましたが、このほど<上写真>のような、ご自分で製作された“陶板”が2枚、<右手紙>とともに届きました。錦町・平田小児科医院さんと錦町・井上薬局さんの店頭に大切に飾らせていただきます。

○土屋千恵子さんは、2年前、原町区の友人のKさん(本会会員)からこの『九条はらまち』を送っていただき本会に入会されました。原町を訪ねたことはなく、「いつも『九条はらまち』をありがとう」「原町に行って九条看板を見てみたい」「前橋市には九条の会がないんですよ」と話されています。本当にありがとうございます。

毎月のニュースを送って頂き、ありがとうございます。
「看板」完成おめでとうござい
ます。「世界は憲法9条をえらび始
めた」本当にその通りですね。内
容も文字も美しいです。大きな看
板はびかびかに輝いて、市民の力
を感じます。行ってみたくです。
私もこの感動を陶板にしてみま
した。文字の線が細くなり、思っ
ように仕上がりませんでしたが、
送らせていただきます。
平成二十年九月二十日
はらまち九条の会事務局様
前橋市 土屋千恵子

看板へのカンパ 目標額を達成いたしました

本当にありがとうございました

はらまち九条の会会長 平田慶肇

かねてより計画中であった立看板「世界は憲法9条をえらびはじめた・あなたは憲法9条を変えて戦争に行きますか」は、8月15日の終戦記念日に立派に完成してこのほど錦町地内に建立されました。

今回の事業では会員の皆さんをはじめ市民の方からも多大のカンパをいただき、本当にありがとうございました。これからも戦争のない世界を目指して、お互いに強い意志をもって頑張っていきましょう。

〇〇〇「九条の会看板」収支報告〇〇〇

看板建設費 240,000円

募金総額 258,000円

(会員・市民の応募者数 225名)

募金超過金18,000円は、会の会計の収入として入れさせていただきます。短期間にもかかわらず、目標額を超える募金が寄せられたことに、この会の力強さを感じました。

平成20年9月30日 (会計 井上由美)

08年8月23日付「福島民友」▼

「九条の会」は全国紙ではあまり取り上げてもらえませんが、発行部数の多い全国の地方紙では、その活動がけっこう掲載されているそうです。その担当記者やデスクの理解や共感で、初めて掲載されるわけですから。いつも好意的に取材し載せていただける『福島民友』『福島民報』『朝日新聞』『毎日新聞』の支局長や記者さんには、感謝いたします。

「福島民報」には
八月十二日に掲
載されました。

十日に「大看板を見る会」を開き、会員が出来栄を確かめた。引き続き、同市原町区の野馬追通り銘醸館で学習会を開き、意見交換した。

憲法九条を守る運動を展開している南相馬市の市民団体「はらまち九条の会」(平田慶肇会長)は、二十一日までに、同市原町区錦町の県道原町一川保線沿いに

「憲法9条」を守ろう

南相馬 市民団体がPR看板設置

世界は憲法9条をえらび始めた
あなたは9条を変えて戦争に行きますか?
はらまち九条の会

憲法9条を守る運動をアピールするために設置されたPR看板

開いている南相馬市の市民団体「はらまち九条の会」(平田慶肇会長)は、二十一日までに、同市原町区錦町の県道原町一川保線沿いに

運動をアピールするPR看板を設置した。

看板には、五月に千葉県の幕張メッセで開かれた「九条世界会議」のキャッチコピーから引用した「世界は憲法9条をえらび始めた」に加えて、「あなたは9条を変えて戦争に行きますか?」と記した。縦〇・九段、横四・五段。会員と一般市民に募金を呼び掛け、二十五万円をかけて製作した。

9月28日(日)、いわき市で開催予定だった ペシャワール会代表 中村哲氏講演会は中止に



悼し伊藤和也さん
の意を代表し敬意を
表しますと哀対

伊藤さんこそ日本の誇りです

■パキスタンのペシャワールやアフガニスタンの復興支援のため、医療や水源確保の井戸掘りや農業、灌漑事業に力を尽くしている「ペシャワール会」代表の中村哲医師のいわき講演会は、8月27日、アフガニスタンで会のメンバーの伊藤和也さん(31歳) <上写真> が拉致され殺されたことで、残念ながら中止となりました。

■講演会を主催した「いわき九条の会連絡会」に届いた中村哲氏の <右・講演中止のお詫び> をそのままコピーします。

■報道でご承知のように、伊藤さんは、NGO「ペシャワール会」の一員として、5年前に現地に入り、サツマイモやコメの栽培、灌漑施設づくりに取り組んできました。50度の炎天下での活動には、現地の人々の大きな信頼が寄せられていました。紛争に苦しむ人々を助けたい、支援したいという人道主義の熱い思いで米国中心の軍事によらない平和的な国際貢献を担う若者の死やその貴い志を、今後私たちは行動でどう生かすか、真摯に考えてみたいものです。テロの心配もない安全な所で安閑としている私ですが、

「武力で平和はかち取れない」

■伊藤さんこそ日本の誇りです、日本の若者にもこんなに素晴らしい人がいるとあらためて希望を感じます。しかし政府(町村・前官房長官)はこの犠牲を機会に、さらに「テロとの戦い」の重要性を訴えています。それは「ペシャワール会」の信念である「軍事(武力)で平和はかち取れない」と相反することです。むしろ、日本人伊藤さんが襲われたこと、西アジアへの日本自衛隊の派兵と関連があるという見方もあります。

■地球環境や資源や世界の経済を見渡しても、日本も世界も平和に共存するためには、中村氏の信念のように「憲法9条」の理念を拡大し実現することが肝要だと、重ねて確信いたします。

講演中止のお詫び

この度、現地ワーカー伊藤和也君(農業担当)の、武装グループによる非業の死を受けて、日本への帰国延期を余儀なくされました。以前から講演会を準備されてきた皆様にはまことに申し訳なく、陳謝申し上げます。また、今回の事件に際しましては、ご心配やお悔やみのお言葉、さらには励ましのお言葉を頂きましたことにも感謝いたします。

伊藤くんの死は、改めて現地情勢の厳しさを知らしめることになりましたが、このような中でこそ、私たちの活動の真価が問われると思います。今後の活動については、返って活動を強化し、言葉ではなく実のある行いを以って、危機的な状況にある人々の救援を継続することをお知らせ申し上げます。現地活動が決して止むことはありません。

本来ならば、「アフガニスタンで何が起きたか、何が起きつつあるのか、この中で私たちが活動を敢えて続ける意味は何か」、知っていただきたい事実が山とあります。

世には様々な人と、様々な意見があります。善意の誤解も、悪意の誤解もあります。中には、伊藤くんの死を政治的に利用し、武力干渉を肯定するようなものもあります。戦争の実体を知らず、弾丸をかくぐったことのない、軟弱な人の空疎な抽象論に惑わされてはなりません。

私を含め、「全ての日本人、報道関係、政治家、一般市民のアフガニスタンへの認識が甘かったことを訴えざるを得ない。」と述べたことが、「治安悪化の認識が甘かったと認めた」と報ぜられたことに疑問を抱きました。要は認識の甘さの内容です。復興支援が武力介入と抱き合わせにあることの問題、誤爆で死んでいく多くの市民たちを生み出す軍事活動、欧米軍の存在そのものが治安悪化の背景にあることに対する「認識の甘さ」は、伝えられなかったのです。思えば六年前、「アフガン復興」がブームとでも呼べるほど話題となっていた頃、私たちは事あるごとに軍事介入とセットで行われる活動を警告してきました。「国際社会に伍して日本の存在感を高める」のが目的ではありません。巷に横行する「国際貢献」とは、ほぼ無縁です。

伊藤くんの死の直接の責任については、当然私にあります。問題が誰がどのように、何に対して責任を取るかです。この冬予想される大餓死に対して、少しでも犠牲者を減らすことによって、元来の責任を果たすべきであります。

「平和とは積極的な力である。戦争以上の努力と忍耐が要る」とは、常々述べてきたことであります。決して決意表明や修辞ではありません。現にアフガン人職員の殉職者たちの屍を越えて、事業は続いてきました。「平和」は、戦争と狂気の中であってこそ、輝かねばなりません。

もの取り強盗であれ、国家的な軍事行使であれ、私たちは暴力主義と対峙し、戦争を肯定するいかなる理屈も信ずべからざることを、改めて強調いたします。「アフガンのために尽くしたのに、恩知らずのアフガン人」というような非難は問題になりません。人間を集団に一括して断罪することが、集団暴力たる戦争の道を開き、差別を助長してきました。

非暴力による実事業の断固たる貫徹、これが現地職員総意の答えであります。

お詫びと共に、皆様の御理解と、変わらぬ暖かい御関心に感謝します。

2008年9月15日
ペシャワール会現地代表 中村哲

